
プレゼントフォーユー

紅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレゼントフォーユー

【Nコード】

N1528T

【作者名】

紅月

【あらすじ】

君と出会ってからどれくらいの時がたったのだろう。この日に卵の夜のロールケーキを買うことになったのは一年前からのことだけだ。

吐いた息が白くなって消える。

「あー寒いなあ」

半日で授業が終わり、今は日の高い昼なのに吹く風は切るように冷たい。今はまだ降っていないが今にも降ってきそうなどんよりとした灰色の空。聖夜と呼ばれる今夜は雪になると聞いていた。

ちなみにはあるが、僕のところには赤い服の老人がやってくることはない。バイトをしている僕はむしろ家族に奉仕する側に立たされている。

僕は学校をさぼったことがない。そしてそれを誇りにしているつもりはないが、なんとなくさぼることに気が引ける。だから卵うがやの夜のロールケーキを買うために授業をさぼるわけにもいかず、一週間以上の交渉を経て、朝早くになら用意してくれるという約束を取り付けた。そして、今日は誰も来ないであろう生徒会室の冷蔵庫に保存しておいた。

僕の今の荷物は四つ。学校指定のスクールバックに弁当袋、傘に卵の夜の袋だ。ロールケーキ以外も入っている。他にも理由はあるが、ロールケーキだけしか買わないことに気が引けたのだ。こういうときばかりは僕の小心者っぷりに涙が出る。財布の厚み的な意味で……。学校からを出ればそこは別世界である。終業式が終わり、遅めに学校を出た僕の周りには学校の生徒はほとんどいない。まるで世界の隅っこのようなさびしいところから数メートル先には今日という日にふさわしくイルミネーションが輝いていた。

彼女が貸してくれたCDの中に入っていた曲を思わず口ずさんでしまう。クリスマスとは全く縁のない歌。タイトルは確か『ワールズエンド・ダンスホール』。この曲に限らず、この作曲者の曲は不思議な中毒性がある気がする。

ちなみにだがネット上の歌姫の曲だ。彼女は病院に引きこもった

生活をしているせいか、現実世界リアルよりも非現実世界アンリアルの方にその趣味が傾いていると感じる時が多い。かという僕だつて彼女の影響で最近はそのちに傾きつつあるのだけだ。

まあ、いいや。今日は遊びに行くとか家族には言つてある。彼女のところへ行くとは言つていない。どうやら病院に住む人間と会うことをあまり快く思つていないらしい。まあ確かに、余命数年の人間を（恋人的な意味で）彼女だと紹介されたら困るだろうとは思ふ。彼女自身はまだまだ生きるつもりらしいけど。

いつだったか、彼女のことを恋愛対象に見ていないとは言つたよ。うな気がするけど、時々、彼女が彼女だつたらなあと思つてしまうことはある。僕だつて男の子だし、彼女は病院で暮らしている割には病人臭さを感じない、儂くはあるもののその儂さは一輪だけ咲いている蓮の花のような静けさとはつきりとした存在感と長年病院で暮らしているうちに失われていく輝きを持つている気がする。……僕のはひいき目なのだろうか毎回悩むが、それを彼女のことを知っている友人に打ち明けたところ恋だと断定された。しかし、今の僕にもその時の僕にもそれが恋だと言われて納得はできなかったしできない。

そうこうしているうちにもう病院だ。病院まではそう遠くはない。しばらく歩いて、イルミネーションを抜け、さらに歩いて少し静かな住宅街を抜け、見舞い者向けなのか、患者向けなのか、はたまた医師や看護師向けなのかよくわからない雑多な品ぞろえをしている店の横に広い駐車場を備えた病院はある。今日は小児科への見舞いが多い日だ。数年目になる病院でのこの日の光景を今年も眺めながら僕は小児科ではない階の彼女の部屋へと入つていった。

三步戻つて戸を閉めた。

「今のは幻、今のは幻、今のは幻」

掌に人の字を三回書く。よし、僕は冷静。すごい冷静。今、この戸の奥で見た光景はきつと聖夜の幻だ。そう幻。世界はかぼちゃでできている。そう、みんなかぼちゃだと思えば何もおかしいことは

ないじゃないか。

意を決してもう一度、戸を開いた。

「失礼じゃないかしら、人の顔を見て戻っていきなんて」

そういう彼女の顔は真つ赤だし、つねられた僕の頬は痛い。現実なのか……。

落ち込まないよ。てかこれで落ち込む奴は相当だと思っ。

「なんでそんなきわどい恰好してるの」

「だ、だって。いつもあなたに何かしてもらってばかりじゃない……」

彼女の恰好はそう。俗に言うミニスカサントだっただ。

やっぱり恥ずかしい……。確かに何もすることがなくてついつい隠してある洋服をあさったんだけど、その時に見つけたこれでちょっと女らしさをアピールしてやろうとか考えちゃったけど、いい考えだと思っちゃったけど、もうこの格好をやめたい。だって、私。がりがりに痩せてる。む、胸だってあんまりないし、背も小っちゃい。こんな恰好をしたところで似合わないっていうのは、わかってるのに。

彼のことをついついいつも考えてしまう。ネット上で彼氏についてブログを書いている人を見て、ついつい彼のことを考えてしまう。入院仲間にそう話して、断定されるまでもなくそれが恋だということとはわかっていた。でも、でも。

「似合ってるよ」

「余計恥ずかしくなるからそんなこと言わないで」

暖房がきいているからこそできるこの格好。太ももの半分もない丈のミニスカートに、へそ出し、肩出し。露出部分の方が多いという事実を彼に見られるだけで意識してしまう。それもこれも彼が一度部屋から出て行ったせいだ。

……でも、似合ってるのか。そう言われると悪い気はしない。

「でも、どうして突然そんな恰好を？　してもらってばっかりって
いうけど、僕だって君からいろいろ借りたりしてるし」

……勇気を出さないと。こうなったらあとには引けそうもない。

内心、どつきどきどきである。もう本当に。これが恋に落ちる瞬間だ
としたらなんて最低な瞬間だろうと思う。落ちる、よりも墮ちるの
方が適切だ。でも、なんだろう、今この瞬間なら友人が言ったこと
も納得できてしまいそうだ。

つまり、彼女超かわいい。これ、全国男性みんな惚れるんじゃない
かと思うくらい。いや、恰好の補正もかかっているとと思うけど、そ
れでも、だ。病人にしてはしっかりと運動して肉がついている
彼女は病院の外でならスタイルのいい方になる。胸だって、そんな
に小さくはないし、背は高くないが、それでも、百六十センチはな
いというだけである。

はあ、どうしようか。僕のところには赤い服の老人ならぬ赤い服の
彼女が現れたのはいいけれど、彼女、さっきからずっと黙ってるし。
そんな彼女に無言で袖を引っ張られる。耳を口元に近づけるよう
にとジェスチャーされたので言われたとおりにする。

秒針の音。外の廊下を誰かが歩いていく音。それらが無駄に大き
く聞こえた気がする。外を見れば雪が降ってきていた。彼女は顔を
見せずにそんな窓の外を見ている。ガラスの反射で、彼女の顔が赤
くなっているのがわかった。

どうやらこれからしばらくは親に心配されることになりそうな気
がした。

(後書き)

あとがき

珍しく恋愛短編です。季節もイベントも何もかも無視しました。『彼と彼女の短編シリーズ』。初回の中から実は一年たったことになっていきます。一年たって心境に変化が起きたということの一つ。

こんな二人はいつまで寄り添っていられるんでしょうかね。

ちなみにですが、彼の方が作中で口ずさんだ曲はwowakasaんの『ワールズエンド・ダンスホール』です。この曲好きです。

まあ、二人の物語はこれで終わることはありません。気が向けば続きますし、気が向かなければひっそりと知られることなく続いていきます。

では

2011.5.9 紅月

2011.8.6

歌詞掲載ガイドラインが追加されたので一部改稿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1528t/>

プレゼントフォーユー

2011年8月7日03時15分発行